

性の問題化と教育実践

中島ゆり（お茶の水女子大学大学院）

1. 問題設定

1990年代末から、性に関する教育実践が雑誌や新聞、あるいは議会において顕著に批判されてきている。1999年に制定された男女共同参画社会基本法への批判とともに、性に関する議論がここに来て葛藤を見せている。このような中で、教育実践を遂行する教師が過激な「性教育」を行なう者として位置づけられ、批判されることがある。

批判されている性に関する教育実践とは、いわゆる「ジェンダー・フリー教育」や「男女平等教育」、「性教育」であるが、とくに「女らしさ、男らしさ」を否定すると考えられているもの、男女を混合にする実践、性交や性器の名前を学年の早い段階で教えるような性教育が批判の対象になっている。このような教育実践は、学校の教師、女性団体や性教育団体、ジェンダー研究者、教育学者などが推進してきた。現在では行政によっても一部進められている。たとえば、小学校学習指導要領では4年生の保健で初経、精通などを含んだ体の発育・発達について理解させるように書かれている。また、地方自治体によっては、男女混合名簿の使用を規定しているところもある。

このような性に関する教育実践をめぐる同意と反発を伴う議論は、戦前、戦後を通して常にあったが、現在の葛藤は、1985年の女性差別撤廃条約の批准後であり、日本における男女共同参画社会基本法の成立後であるという点で、すなわち、

国連や国の性に関する政策が一定の傾向を示す中での批判であるという点が、それ以前とは明確に異なるところである。このような情勢が示唆することは、明文法に規定されているという理由で性に関する教育実践が広範囲の同意を得られるわけではなく、また、正統性も必ずしも認められないということである。

このような性に関する教育実践に対する批判や無理解は、それを実践する教師が、どのような背景の下に、どのような性に関する教育実践を行なうようになったかという点が見過ごされているところからも発生しているように見える。

本報告では、性に関する教育実践に早い時期から積極的に取り組んでいる教師たちに着目し、彼らがいかなる性に関する事柄を問題化し、教育実践を構築していったのかを、フェミニズム運動やジェンダー理論といった理論的背景や社会的背景と照らし合わせつつ分析することを課題とする。これにより、性を問題化し、教育実践を構築していった教師の活動における課題を提示したい。

2. 調査の対象

本研究では、首都圏内のB市において1980年代から、性に関する事柄について研究や学習会を重ねている教師たちに注目する。80年代前半にはB市では、ほぼ100%の教職員組合参加率であり、この教師たちも教職員組合でのつながりが中

心である。性の問題化はとくに教職員組合の婦人部（女性部）に所属している女性の教師を中心に行なわれてきた。とはいえ、この教師たちは研究会や学習会を通じた流動性のあるつながりであるため、集団としてその範囲を決定することができない。そのため、本報告では、最も長期にわたって積極的にこれらの会に参加してきた教師のうちの一人（A先生）を中心におき、彼女が性について問題化し、教育実践を構築していく上で、80年代初期から参加してきた性に関する研究会や学習会での文書資料や教育実践の記録をデータとして使用する。また補足的に、2001年から2003年にかけて研究会や学習会に参加している教師の一部に対して行なったインタビューとフィールドワークのデータを用いる。

3. 教育実践の特徴

A先生を含め、婦人部（女性部）に所属していた教師たちは、80年代から性に関する事柄を独自に子どもや教師を対象にアンケートをとったり、全国教研や地区の教職員組合の学習会、あるいは、各々の学校の校内研で教育実践の内容や理念について発表する機会を設けてきた。

彼らの資料によれば、彼らの教育実践は、80年代、90年代、00年代を通して、主に、性別役割分業、女らしさ・男らしさ、男女を区別することを問題とし、仕事、歴史、性教育、名簿や整列、教科書点検に着眼している。

ところで、彼らが性を問題化した80年代前後には、どのような動きがあったのだろうか。1977年に日教組の教研全国集会において女子教育の分科会ができ女性の経済的自立などについて研究する場が誕生している。1979年には「行動する女たちの会」教育分科会が教科書の中の性差別を点検した『女はこうして作られる』

を出版している。1981年、82年には旧総理府が「婦人問題に関する国際比較調査」を行なっている。さらに80年代には、各弁護士会が高校の家庭科別履修や全日制普通科の男女格差募集、教科書の中の性差別について意見書を提出している。性教育に関して言えば、1972年に財団法人日本性教育協会（JASE）が、1982年には民間団体の“人間と性”教育研究協議会（性教協）が設立されている。

このような社会的な背景がある中で、80年代初期に彼らは性別役割分業の問題を中心に性を問題化していく。さらに彼らは男女混合名簿などの男女を混ぜる実践にも力を入れる。この教育実践と併せて、性教育についての研究を進める。彼らは、教育実践の進め方を思考すると同時に、自分たちが問題だと考えている事柄について、いかにそれが問題であるかということを示唆できるよう模索している。

4. 考察

B市の教師たちの性別役割分業への問題意識は、女性の教師として自らの労働や環境を振り返ることを行なっていることから、70年代のフェミニズム運動と連結していると考えられることができる。これに対し、男女混合名簿の採用は、ポスト構造主義フェミニズムの関心と近似しているように見えるが、ジェンダー理論は決して先行していない。教師たちの理論においては、その採用は管理教育や学校教育の秩序の問題と結びつけることで理解されている面がある。すなわち、彼らの教育実践はジェンダー理論、フェミニズム理論の流れを参照していると同時に、教師という職の視点から、独自に性を問題化しているのである。

なお、詳細なデータと分析、参考文献は、発表当日に配布するレジュメを参照して下さい。